

国際耕種創立 30 周年を迎えて

お陰さまで国際耕種は本年創立 30 周年という大きな節目を迎えます。この 30 年の間に我々の活動がどのように変化してきたかについて、以下のように 10 年毎に振り返ってみました。それぞれの時期で我々の活動の変遷と発展を見いだすことができました。

【1984～1994 年】乾燥地の専門家を目指して：

国際耕種の黎明期であるこの期間は、アラブ首長国連邦での「沙漠緑化研究協力」という大学間研究協力プロジェクトを足場に、砂防植樹、作物栽培法、耐塩性品種選抜、水耕栽培等の研究協力を行いました。これらの活動は、湾岸戦争を挟み 10 年以上にわたって継続しました。また、中東・アフリカで長期/短期の専門家としても活動に参加していました。活動の中心は乾燥地域での栽培、土壌、土地利用、環境といった限られた分野での技術協力中心でしたが、乾燥地農業分野での技術力の蓄積/国際貢献への足がかりを築いていきました。

【1994～2004 年】「乾燥地農業の国際耕種」へ：

この時期になると、アラブ首長国連邦や他地域での経験を買われ、「乾燥地農業の国際耕種」というイメージを関係機関によりよく認識してもらえるようになってきました。技術的にも活躍の分野が広がり、オマーンでの農業研究やシリアにおける農業普及と活躍の舞台を広げていきました。後にオマーンでの活動はマングローブ植林へと、シリアでの活動は節水灌漑普及へとつながって行くことになります。さらに、乾燥地での水資源開発やオアシス開発といった総合技術力を必要とする活動へも活動の場を広げることが出来るようになりました。一方、国内では、乾燥地緑化手法技術に関する文献調査や自然保護、環境影響評価業務、JICA 筑波センターでの野菜栽培技術研修指導に携わりました。それと共に各業務を通じて知り合った専門家が国際耕種へ加わりはじめました。

【2004～2014 年】独自の技術協力活動の実践：

この時期になると国際耕種主体によるプロジェクトの

実施がはじまり、シリアでは 2005 年から 7 年にわたり節水灌漑の研修普及に関する技術協力プロジェクトに携わりました。また、パレスチナでの農業普及、オマーンにおけるマングローブ植林に関係した技術協力プロジェクトにも参加しました。さらに、この時期から新たにウガンダのネリカ米振興計画にも深く関与することになります。国内では、JICA 筑波センターにおける野菜栽培研修業務を継続的に実施し、茨城県里美や岡山県牛窓における有機農業グループとの連携を通して日本の農業との関わり方についても模索をはじめました。

このように我々の活動を 10 年ごとの 3 段階に分けて考えてみますと、当初の乾燥地での個別技術支援業務から、分野・地理的な拡大を経て、乾燥地域における地域開発・技術普及と国内での研修を中心とした業務体系へと移行して来ました。これは極めて自然な流れだったように感じます。国際耕種創立時代から、乾燥地域における適正農業技術の確立や普及を通じた人づくりを目標に、我々は現場におけるカウンターパートとの協働に人一倍力を注いで来ました。常に現場での人間関係を大事に考え、多くの現場仲間と付き合い、彼等と気兼ねなく話し合える雰囲気大切にしてきました。本邦研修に参加するカウンターパート達が日本に滞在すれば、出来る限り会いに行き、現場の仲間とは交信を密にするよう努力してきました。こうした濃密な人間関係こそが基となり、シリアやオマーンでは 20 年にも及ぶ繋がりが保てているものと考えます。さらに、現場で役に立ちかつ現場で実現可能な農業技術なり普及技術なりを現場の技術者と一緒になって模索したいという「こだわり」を持ち続けています。

国際協力や技術協力の在り方も変化していく中で、「少数精鋭」を自負し、現場での協働にこだわり、真に地域住民に貢献できる技術支援を実践したいという信念でこれからも頑張りたいと思っています。今後とも御指導、御鞭撻の程をどうかよろしくお願い申し上げます。

(2014年1月大沼洋康)

